小池辰雄著作集　第４巻『詩篇珠玉集』

# 【目次】

# 【詩篇　第103篇】

　(1)　ダビデの１　わが魂よ、エホバをめまつれ。

　　　わがよ、そのを讃めたたえよ。２　わが魂よ、エホバを讃めまつれ。

　　　そのすべての恵みを忘れるな。

３　彼はが不義のすべてをゆるし、　　　がのすべてをいやし、

４　彼はが生命をの穴からい出し、

　　　しみとみを汝にらせ、

５　彼はが口をで飽かしめ給う。

　　　汝はが若さを新たにしての如くなる。

６　エホバはすべてげられている者のために、　　　義を行じをなし給う。

７　彼はおのが道をモーセに、

　　　おのがをイスラエルの子らに知らしめた。

８　エホバは憐みと恵みにあふれ、

　　　怒ることおそく、しみゆたかである。

９　いつまでも争うことはせず、

　　　永遠に根にもつようなことはしない。

10　彼はわれらの罪なりに我らをあしらわず、

　　　われらの不義なりに我らに報い給わない。

11　げにや天の地を越えて高きが如く

　　　彼の愛は彼を畏れる者の上に力強い。

12　東が西から遠くへだたるように、

　　　彼は我らの罪過を我らから遠ざけた。13　父がその子らをあわれむように、　　　エホバは彼を畏れる者を憐み給う。14　そは彼は我らのを知り、

　　　我らが塵なることをい給う。

15　人はその月日、草の如く、　　　花咲くとも野花のようだ。16　げにその上を風が過ぎればその跡もない。

　　　彼の生い立ちも知るもない。17　エホバの愛はから永遠に畏神者の上に、

　　　その義は子らの子らに及ぼう。

18　それは彼の契約をり、

　　　彼の訓命遂行を念とする者のためである。

19　エホバは諸天にそのを建て、

　　　その王権は一切を統治している。20　エホバをめたたえよ、その天使らよ。

　　　そのを行う力ある勇者よ。

　　　その聖言の声を聞こうとする者よ。21　エホバを讃美せよ、その万軍よ。

　　　そのを行う奉仕者よ。22　エホバを讃美せよ、そのすべての被造物よ、

　　　そのべ治めるすべての処で。

　　　わが魂よ、エホバを讃美せよ！

〇　この詩篇は極めて福音的であるので「旧約の福音」と題した。

１　「わが五臓六腑」（コル・ケラーバイ）＝「私のケレブのすべて」ケレブという語は、身体の内部、胸や腹の体腔で、生命、心、霊の内住する体腔、といった意味の深い言葉。それで「五臓六腑」と訳した。

# 第103篇　旧約の福音

# ●まえがき

今日は詩篇第103篇。これはある意味において、詩篇１５０篇中の最大なるものと言ってもいいかと思います。それで『旧約の福音』と題しました。節の数も、ヘブライ語のアルファベットの数、２２節から成っています、いわゆるイロハ（ＡＢＣ）歌ではありませんが。

これを読んでいると、もう解説するのがいやになってしまうすばらしい詩篇です。これに福者のすべてが入っている。旧約にこんな詩篇があるのかと思うくらいです。何と言っても旧約の世界は律法が強いですが、そういった陰はほとんど見えない。どうしてこんな詩篇が生れたろうかと怪しむくらいです。しかも地獄的ななやみの102篇に対して、103篇は天国的なよろこびの詩篇です。それはちようど、ロマ書７章と８章、或はイザヤ書34章と35章が地獄と天国の対称をなしているのに似ています。

# ●福音の根底（１～５節）

　(1)　ダビデの

「ダビデの」とありますが、たといダビデの作でなくとも、彼の魂はこういう福音に向かっていました。第一段は１～５節です。この第一段は極めて個人的な救いの消息、恵みの消息を、何とも言えなく表現していますね。何とこれは旧約をつきぬけた魂かなと驚嘆いたします。

１　わが魂よ、エホバをめまつれ。

　　　わがよ、そのを讃めたたえよ。

「わがたましいよ」というのはこの場合「ネフェシュ」という字で、英語の「スピリット」でなくて「ソール」のほうですね。ドイツ語で言うと「ガイスト」でなくて「ゼーレ」です。ヘブライ語のネフェシュは、ちようどギリシャ語で言うとプシュヘーにあたります。

「わがたましいよ」というのは、霊と心の中間のような言で、漢字では魂にあたるわけです。「気息」の意もあり、肉体を生かしている霊的生命の坐です。

「エホバをほめまつれ、わが五臓六腑よ」

「わがたましい」と言って、今度は、「わが五臓六腑」。ヘブライの詩は、よく対句的に言いますから、「エホバをほめまつれ」に対しては、「そのきよき御名をほめたたえよ」と応じています。「エホバ」に対しては、「きよき御名」。「わがたましい」に対しては、「わが五臓六腑」。「五臓六腑」と言うのは「ケレブ（うちなるもの）」という字で、これはまさに内なる五臓六腑、英語で言うと「バウル」です。即ち魂と五臓六腑、全的な存在としての自分そのものです。それでこの句は魂もも、一切がという意味です。心も体もエホバをほめまつる。エホバは、すなわちです。「彼の聖なる聖名」「シエーム・コディショー」。それで、イスラエルの聖者なる神をほめまつれ。このほめまつれという言葉はもともと「バーラック」という字で、恵むという字です。だから、「恵みを神に帰せよ」という意味があるんです。「バーレキー・ナプシー」は、本来は神を「恵みあるものとせよ」という意味です。哲人バルーク・スピノザはユダヤ人ですから、その「バルーク」は即ち「恵まれたる者」という意味です。

２　わが魂よ、エホバを讃めまつれ。

　　　そのすべての恵みを忘れるな。

「そのすべての恵みをわすれるな」と。ここの恵みというのは「ヘセド」ではなく「ゲムール」という字の複数形が使ってあって「めぐみのわざ」といった意です。

私たちの過去は、つまずいたり、ころんだりしたのにもかかわらず、全部めぐみに包まれているわけです。すべての恵みと言っても、恵みをただ数えたってしょうがない。恵みにおいて、恵む者それ自体、恩恵者即ち恵みの主体である神さまを忘れるなと言うこと。そうしないと御利益信仰になります。私はこれこれの恵みにりました、と言って、恵みだけを喜んでいたら、いわゆる御利益信仰になってしまう。めぐみの奥の神そのものが恵みの主体ですから、「恵みなる神を忘れるな、神さまは恵みももくだす、これは神の業である」と、ヨブ記の中にあるように。だから、どんなことにあっても、わたしはただ聖名をたたえるという。

「エホバ与え、エホバ取り給う。エホバのは讃むべきかな！」

という有名な言葉がありますね（ヨブ1･21）。この「讃むべきかな」も「メボーラーク」で元来「心みを与える者」の意です。

３　彼はが不義のすべてをゆるし、　　　がのすべてをいやし、

「汝」というのは、自分に言いかけている。癌は癒えないじゃないか、と。そうじゃないですよ、癌だって癒えるんです。根源的には癌も癒えてしまう。すべて現象にとらわれているうちはだめですよ。現象の奥の世界をつかまえないと信仰は本物にならないです。どうせ厳密に言えば、みんな病人ですよ、地上にいる我々は。どんなに健やかな人だって、つねに病菌をもっていて、これと戦っているにすぎません。そこには何らかの欠陥があります。魂も、どんなに立派そうに見えたって、自我になやまされている破れ器。だから万人はみな罪人です。

「義人なし、ひとりだになし」

とパウロが言っている通りです。キリストだけが例外者。そのキリストも罪を知っていらっしゃるですよ。ただ彼は罪に陥らなかった。けれども我々と同じように人間の弱さは全部知っていらっしゃる。だから、神に、汝の聖意と言って、自分をいつも委ねておられた。おれは罪を犯さないんだと言って、平気な顔をしているイエスではないですよ。キリスト自身は地上にイエスとしてあった間は危機的存在であった。イエスは罪を知っていらっしゃったけれども罪を犯さなかった、負けなかった。

「不義のすべてをゆるし」、すべての不義をゆるせるのはキリストだけです。神さまはゆるし給うけれども、キリストにおいてゆるす。仏教的な大悲人慈とはちがう。すなわち、キリストは十字架においてゆるし給う。だから新約の私たちの立場では、十字架の贖いのゆえに、過去・現在・未来の一切の罪はすでにゆるされている。人間としてはどこまでも、つまずいたり、ころんだりしますよ。けれどもそれを自分でどうのこうのしたってどうにもならん。むしろゆるされている自分をはっきり受けとって前進していく前むきが大切です。つまずいたら、すみません、とひれ伏して進んで往くわけです。そういった十字架の絶対恩寵、これがすなわち、すべての不義をゆるしという根底の現実です。キリストはすべての罪を十字架においてゆるし、すべての病をみたまの力で癒し給う。そのような実力あるキリストの愛が、一切の罪と病に対する勝利です。聖霊を与え、私たちに永遠の生命を与えて下さっているから、私たちは、やがて肉体は死んでも、その奥に、死んでも死なない霊体がきている。これはキリストがヨハネ伝でおっしゃっている通り。

「われを信ずる者は死んでも死なない」

と言うことで、「信ずる」と言うのは、キリストが神の子であるということを信ずるのではない。キリスト自身を、即ち永遠の愛の生命を受けとるということです。

そのようにキリストを信受していれば、病はすでにいやされている。それは相対的な健康ではない、絶対的健康の世界に入れられている。霊体が与えられているから、肉体は、血気の体は滅びても、霊の体が生きていく。事実、相対的にも病はずいぶん癒えますよ、正直。聖霊の力がくると、本当に御霊のバプテスマを受けると、今までの精神的また肉体的な調子の悪かったのが忘れたようになおっちゃった、という例はいくらでもあるのだからね。それは一つのしるしです。はっきり現われてくる。キリストはそのような信に基づく祈りを通して、既にどれほどの人々を、こんな私を通してでも、助けて下さったか、ちょっと数えきれません。

霊的な本当の具体性、これを受けとっていけば、もう相対的現象は問題でなくなってきますから、だから、

「彼は汝のすべての不義をゆるし、汝のすべての病患をいやし」

が然りアーメンとなる。こういう場合はどうなんですか、なんて。こういう場合なんてありゃしないんですよ。信ずるとはそのような無条件的な根源的なものです。

４　彼はが生命をの穴からい出し、

　　　しみとみを汝にらせ、

まさにその通り。死は単なる関門であって、キリストに在って生くるかぎり、滅びでも何でもない。キリストの贖罪愛は、いわゆるいのちよりも強いものです。キリストの霊は贖罪愛の霊ですから、「愛しみと憐み」、「ヘセドとラハム（の複数）」という字ですが、両方共大事です。愛といろいろな憐れみです。

５　彼はが口をで飽かしめ給う。

　　　汝はが若さを新たにしての如くなる。

「」は、新約のルカ伝では聖霊のことを、

「をざらんや」

とキリストが言われた、あのは、まさに聖霊のことでしたが、新約の光で読めば、

「汝はに聖霊にてあかしめられる。斯くてなんじはやぎて鷲のごとくたになるなり」

と。これはイザヤ書40章の終りに出てくるあの句と同じです。

「鷲のごとく」、非常に力強い生命的な事態を鷲の如く、若鷲の如く、と言いますね。嵐に向かって飛び立って行くからね、鷲は。嵐が吹いてくると喜ぶんです。いい加減な風じゃだめなんだ、鷲なんていうやつは。そして太陽に向かって進んでいく。ドイツのフィヒテという哲学者が、ドイツ人の魂をそういう鷲に譬えて表現している。太陽に向かって限りなく進んでやまないのがドイツ魂であるということを「ドイツ国民に告ぐ」という有名な演説の中で叫んでいます。あれはナポレオンにされていた時だからね。その後ビスマルクもロシアの威圧に対して、ある演説の終りに、

“Wir Deutsche fürchten Gott, aber sonst nichts in der Welt.”

「我々ドイツ人は神をれる。その他の何ものもおそれない！」

と叫びました。

１節から５節で、はっきりそういった十字架・復活・聖霊の恩寵のかくれた福音が語られている。どうしてこんなすばらしいことを、キリストに出っくわさない旧約の人が言えるかとあやしむばかりです。エホバの神を、本当にそういった贖罪愛の神、聖霊の力の神としてはっきり受けとっている。

# ●歴史に現われた神の恩寵（６～13節）

第二段は６節～13節。ここにモーセとかイスラエルの子らという歴史が出てきた。個人の体験から歴史の方へ向かって、イスラエルという歴史的な恩恵のあとを、彼は思いながら語っているわけです。

６　エホバはすべてげられている者のために、　　　義を行じをなし給う。

セデカー「義」とミシュパット「審き」という字はよくでてきます。神の義を以てする公平なる審きです。

「虐げらるる者」というのは、歴史的にはイスラエルの民がエジプトに半奴隷状態でいたでしょ。彼らはエジプトにげられていたが、彼らを救ってやれと、神がモーセに告知しました。その出エジプト記第３章あたりが背景になっているとみていいと思います。

７　彼はおのが道をモーセに、

　　　おのがをイスラエルの子らに知らしめた。

「おのが道をモーセにしらせ」と言うのは、そういうことです。出エジプトの道、虐げと患難から救う道です。だけれども、イスラエルの子らはモーセが受けとったようにはなかなか受けとれなかった残念な面があります。預言書にもよく、「出エジプト」のことが出てくるですね、虐げ、迫害、患難からの贖い出し。それからもう一つ出バビロニアというのがある。これは、バビロニア捕囚、紀元前６世紀の初めの頃、５８７年、あのバビロニアにやっつけられて、エルサレムが陥落して、そしておもな人たちがバビロニアに伴れてゆかれたのでしたが、ペルシアの王クロスが解放してくれたですね。５３８年頃のことです。バビロニアから解放されたのは、イスラエルの神に対する不信仰の罪からのゆるしでありました。出エジプトの方はイスラエルの患難からの救いでした。出エジプトと出バビロニアはこういう二つの種類の神さまの救済で、これは歴史的に極めていちじるしいできごとでした。出エジプト、出バビロニア。我々の人生でも、この出エジプト、出バビロニアが繰り返されるわけです。

８　エホバは憐みと恵みにあふれ、

　　　怒ることおそく、しみゆたかである。

ここに怒りという言葉が出てくるんですね、それでなぜ神さまか怒ったか。出エジプトの時は、神さまはイスラエルに対して何も怒ることはない。怒りの方は何かと言うと、神の義が怒りという姿で現われるわけですから、すなわち不信に対する神の怒り、不義というのは神さまとの関係が破れることが不義ですから、不信は、すなわち不義である。不信に対するところの怒りだから、この怒りになると、これはバビロニア捕囚のことが前提となっているとみてさしつかえない。

９　いつまでも争うことはせず、

　　　永遠に根にもつようなことはしない。

新約では、「の怒り」というのがある。キリストの怒りである。これは、もう世の終りです。キリストが限りない恵みをもって、即ち十字架と復活と聖霊の恵みをもって、いつでも、だれでもを、無条件に迎えようとしているのに、いつまでも恵みを拒み、不信をつづけていれば、ついに神の怒りが爆発するときがくる。世界は傍若無神になって、恐ろしい兵器がたくさん出てきた。一触即発、世界は火の海になっちゃう。そういうような破滅が来たら、そこに羔の怒りが現われる。

だけれども、そういう終末をらせようとは神さまは思っておられない。

10　彼はわれらの罪なりに我らをあしらわず、

　　　われらの不義なりに我らに報い給わない。

何と深いゆるしの神さまか。我らの罪とがを見て見ぬのである。聞いて聞かぬのである。キリストの十字架が神の目をそらせ、神の耳に対する防音となっている。

11　げにや天の地を越えて高きが如く

　　　彼の愛は彼を畏れる者の上に力強い。

畏神とは平伏しのたましいとなることです。

12　東が西から遠くへだたるように、

　　　彼は我らの罪過を我らから遠ざけた。

いつくしみは主を畏るるものに大にして、天の地よりも高きがごとく。いつくしみはものすごい広大なる高い恵みである。またそれが地にくだってくると、そのわれらより罪を遠ざけたもうことは東の西より遠きがごとし。我らの罪過を遠ざけて問題とせず、お前はこうだ、ああだ、なんておっしゃらない。

13　父がその子らをあわれむように、　　　エホバは彼を畏れる者を憐み給う。

「畏れる」というのは平れ伏す心です。こわがることではないですよ、畏れかしこむという字なんだからね。今の聖書にはみんな「恐」の字が書いてある。こわがるのではなく、ひれ伏して信頼することである。そこには神さまの恵みがくるし、神さまの権威がくるんです。ひれ伏さないで、おれは、なんてやって傲慢になるともうそれはサタンの手下になっているわけである。あわれみの心は実力のある者がもつ。父なる神は無量の実力者であるから、深いあわれみをもち給う。キリストは、神さまを「父よ」と呼んで父のあわれみにおのれを全托された。

では、父に対して母はあるか。それはマリヤではない。言うべくば、それはみ霊である。聖霊です。聖霊は愛の霊でありますから。母性愛が執り成す愛であるように、み霊は執り成しの霊でもあることはヨハネ伝のキリストの言によって明らかであります。御霊は正に執成の霊！　そこで三位一体という父・子・聖霊は、父・子・母となりましょう。イエスの父は神、イエスの母は聖霊といっても可いわけ。こういう表現はどこまでも霊的な表現ですから、その点誤解なきようにねがいます。聖霊はそのような執成しの霊、その意味で祭司、坊さんは本来大切な存在であります。しかし聖霊は勿論、父的な力強い霊、権威をもった霊でもありますから、父性、母性の両面があることを忘れてはいけません。みたまのバプテスマにあずかった者はそのことが充分うなずけるわけです。

イザヤ書に父なる神のことがハッキリ語られてあります。

「汝はわれらの父なり、アブラハムわれらを知らず、イスラエルわれらを認めず、されどエホバよ汝はわれらの父なり、よりなんじのを我らのといえり」（イザヤ3･16）

神は父であり、贖主であると。イザヤ書１章から39章までを第一イザヤと言います。40章から55章までが第二イザヤ。56章から66章までが第三イザヤ。

三人の人の筆に成るもので時代的にも相前後してますが、三人の精神は一貫している。しかも第一イザヤは聖なる神を、第二イザヤは贖いのを、第三イザヤは聖霊の消息を特色としているといっても可いので、まことにふしぎな構造です。聖書全６６巻、イザヤ書は全６６章、だから全聖書をイザヤ書は、ある意味において代表していると言ってもいいくらい。

まあ旧約の中から何をとるか、と言ったら文句なしにイザヤ書をとるね。あんたがたは狂える人の如くなって身読しなさいよ。とにかく、キリスト者もむきにならなくちゃダメですよ。私はかつて、預言書にり込んじゃって、その聖書はボロボロになっちゃったよ。

「ここにそのいにしえのモーセの日をおもいいでてけるは、かれらとそのの牧者とを海よりえあげし者はいずこにありや。

海とは紅海のことです。さっきの出エジプトのことです。

彼等のなかにをおきしものはにありや」（イザヤ63･11）

第三イザヤは、どうして下さるんですか、と神さまに迫っているけれども、イスラエルの民がだめになっちゃったから、神さまの方でそっぽを向いているんだ。それを神さまどうして下さるんですか、と言って、この預言者は一生懸命喰いついているわけだ。その神に向かって「父」と呼びかけている。民族的な角度から時々預言者が「父」と言っているのを、もっと個的な意味で、また世界的な意味で「父」という言い方をつかまえちゃったのがイエスです。

「されどエホバよ汝はわれらの父なり、われらはにしてなんじはなり」（イザヤ64･8）

この「泥塊」や「陶工」のことはエレミヤ記第18章、第19章にも出てくるね。

「汝はわれらの父なり、……われらはみな汝ののわざなり」（イザヤ64･8）

まあとにかく預言者イザヤにおきましては、よく「聖者」、聖なる者という言葉や、また今言った「父」という言葉が特に出てくる。そういうように歴史を顧みて、そして、患難からの出エジプト、罪と罰からの出バビロニア。神の怒りはいつまでもつづいてはいない。神さまの怒りは本当に憐みがかくされている怒りですから、ひれ伏していけと。ひとつも恐いことはないと。神さまは無条件にゆるし給う。

そこで我らは新約のパウロの言うように、

「われ汝のに、汝わが中に」

という内在関係、イン・アイナンデル（互いの中へ）の関係。神・キリスト・我というこの三者一如の関係。こういう現実に祈りで入っていかなかったら、いつまでたってもしょうがない。中へ入らなくっちゃ。

「わが魂よ、わが五臓六腑よ、汝の中に人る」

と。こういう福音的神秘を今のキリスト者がもっと本ものにしなければダメです。こういう一如的神秘は聖霊によって可能となるのです。ただ十字架で贖われていますと言ってるだけでは前進できません。そこに御霊がないからです。パウロがはっきり言ってるじゃないですか、パウロさんをどうしてくれるんですか。

「私はキリストのうちに、キリスト私のうちに」

というのは形容的に言っているのですか。形容じゃないですよ。現実ですから、本当に。だからインの世界に入るのです。「信仰」の仰の字はいらないんだ。はじめは仰ぐかも知れないけど、交わる世界に入んなくちゃ、魂の交わりの世界に。私はもう信仰の仰の字を仰ぐと書くのをよそうかな。信交です。もう思い切ってやらなければだめなんです。第二の宗教改革をあなたがたがやって下さい。

# ●過ぎゆくものと過ぎゆかざるもの（14～18節）

今度は第三段（14節 ～18節）。

14　そは彼は我らのを知り、

　　　我らが塵なることをい給う。

15　人は、その月日草の如く、　　　花咲くとも野花のようだ。16　げにその上を風が過ぎればその跡もない。

　　　彼の生い立ちも知るもない。

人間のはかなさを、その通りに書いてある。聖書はあらゆる現実をごまかしなく書いている。何々主義なんてのは全部入っている、聖書の中には。全部そんなものは溶かしちゃった、包んじゃった、突きぬけちゃった。だからドラマだと言っているんです、私は。聖書はドラマだ。ドラマの中で線太く生きてくれなくちゃ困るよな。私のこういう日曜の集会に来て、言葉じゃないですよ、その響き、その魂、その気合を受けとってくれなくちゃ、いつまでたっても始まらない。分析的な判断をする人たちは私に躓いて去ってゆく。パウロが言ったように、この土の器の中にある金剛石が、または自然の火が見えないのです。同じく金剛石を宿し、同じく白熱の火が点ぜられたら、私と一緒に死を賭してもやってゆくでしょうのに、お気の毒なことです。そういう人々のため私は正直、執成の祈りをしています。

17　エホバの愛はから永遠に畏神者の上に、

　　　その義は子らの子らに及ぼう。

18　それは彼の契約をり、

　　　彼の訓命遂行を念とする者のためである。

18節はまさに旧約的です。我々ははかない器なんだけれども、主の愛は「永遠より永遠に」（メオラーム・ウエアッド・オーラーム）主をおそれる者の上に、その義は「子孫の子孫に」あらんと。愛と言って、今度は義と言っているでしょ。愛、義、恵み、ここらはすっかり預言者イザヤに似ています。

「神の義はその福音のうちに顕れ」（ロマ1･17）

と言ったあのロマ書の元はこういうような言葉に歴史的にはあるわけです。愛と憐みと義が一つなんです。これは審く義ではない。神さまが憐むこと自体が義なんです。これをマルティン・ルッターはなかなかつかめなかった。神の義とは審く義ばかりだと思ってね、それで苦しがっていた。ところが義は与えられるものであった。神さまは義を与える。それが即ち憐みなんです。愛なんです。

今は霊的人物の飢饉です。けれども、要するにひれ伏さなければいかん。畏るべきものを畏れないから一切の狂いがきちゃってる。問題は教育の、そして一切の文化文明の現象の奥に、福音の宗教の世界がないからダメなのです。私は倒れるまでこのことを叫んで行きます。神さまの前にだれでも降参すれば、すばらしい神の義を賜わって、本当に筋金の通ったことになっていくわけです。上から力がくるし、本当の愛はくるし。

「その義は子孫の子孫にまで及ぶほどである。その契約をまもりその訓命遂行を念とする者のためにである」

訓命を心にとめて、律法を心にとめて行う人、この精神はまあ旧約ですが、しかし、行うということは極めて大事なことです。突っ込んで言えば、神の言は、神の言を本当に心にとめれば、

「わが言は霊なり力なり」

ですから行に転じます。神の言は即ち神の行に転じて我々を実行せしめる。どんなに破れ器であっても、人間的完全よりもすばらしい。どんなにすばらしい造り花も、自然の花にはかなわない。とにかく自然というのはすばらしいです。私は自然を見ていても、決してただ自然を見ているんじゃないです。そこに神さまの心を見ているんだからね。

われらのられたさまがまことにはかないと。

「人のよわいは草のごとく」

と、まあ大体いくら生きても百歳位までですよね。イザヤ書に

「百歳で死ぬものもなお若しとせられる」（イザヤ65･20）

なんて書いてある。

「その栄えは野の花のごとし」

そういう人生の諸行無常、

「色は匂へど散りぬるを　わが世たれぞ常ならむ」

という。

「いつくしみはから永遠に」

と。これも質的につかまねばダメです。即ち一日を千年の如く生きる。一日千年という言葉がある。

「千年は一日の如く、一日は千年の如し」

と、ペテロがそう言った。一日を本当に生きる人は、質的に永遠なのです。永遠の今を生きるような生き方になりますから。だから現実の相対的なはかなさも、最早突破してしまっているのです。神さまに、その憐みに浴する者はだれでもがそうなのです。さっきはイスラエルの歴史から、今度は人類的に突破しているわけです。ここでは、個に徹すると人類的に突破する。だから14節から18節までは、個人の体験から、そういった人間そのもの、人類そのものに、万人に向かっての恵みの事態に突き抜けていると、そう見ていいわけです。これが第三段でした。だからこの詩の構造はすばらしいよ。

# ●天的実存の讃美（19～22節）

第四段（19節～22節）

19　エホバは諸天にそのを建て、

　　　その王権は一切を統治している。20　エホバをめたたえよ、その天使らよ。

　　　そのを行う力ある勇者よ。

　　　その聖言の声を聞こうとする者よ。

イスラエルの神エホバは超越神として王者として霊界に君臨して一切を統治しているという神政がはっきり告白されています。天上の天使も地上の勇者もこの神への奉仕に存在の意義があるのです。

21　エホバを讃美せよ、その万軍よ。

　　　そのを行う奉仕者よ。

聖言を行う者が勇者なんです。神言の行者、これが本当の英雄なんです。あなた方、ひとりびとり英雄なんです。なんです。神言の行者が本当のエホバの僕、神さまの僕、

「われはキリストのなり」

とパウロが言った。僕、本当の僕が勇者なんです。イエスほどの勇者はいません。最大の勇者です。イエスは小羊と言われるけれども、小羊は獅子より強いんだ。神さまに完全にひれ伏している人は最大の勇者です。そして、ひれ伏しているからその聖意を体現することができるのです。行者、御心の体現者となる。それでだとか御使だとか、万軍だとか言ってるでしょ。それは天界だ。そして、こちらは僕として地にある。だから天地相応えているところの天地万有の神奉仕です。

22　エホバを讃美せよ、そのすべての被造物よ、

　　　そのべ治めるすべての処で。

　　　わが魂よ、エホバを讃美せよ！

最後にまた最初の言葉にかえっている。まさにこれ円環関係になっていますね、すばらしい詩だね、これは。個から民族、人類にきて天地に突き抜けちゃった。まあこんな詩篇はちょっとないですよ。私は驚いたね。

今朝読んでいて、ああこれだ、これだと！　実はきのうからどれにしようかと思ってたんだ。今朝、これだ、これだって、そういうことなんですよ。とにかく、そういう詩篇第103篇というのは、これは「旧約の福音」、この題が一番いいと思った。旧約に現われているところの福音、実に深遠にして壮大だからね。パウロとヨハネを一緒にしたようなことを言っている。これがダビデならダビデはすごいなあと思うけれども。バビロニアが入ってくるところはダビデではないですよ。大体ここに出てくる詩は、相当預言者の言葉と同類のものか出てきてるから、これは預言者と同列のだれかが書いた。第三イザヤと同列のような人が書いたんでしょう。あんたがたは楽しくならなかったですか。

（１９７６年１１月２１日、東京キリスト召団武蔵野幕屋日曜集会、録音による）